福井県大飯郡おおい町岡田西安寺石造五重塔実測調査

古川　登

はじめに

福井県大飯郡おおい町岡田の西安寺に所在する石造五重塔の実測調査を、おおい町教育委員会の依頼を受けて二〇〇九年一〇月三日（土曜日）に実施した。実測の目的は、おおい町指定文化財に指定するための基礎資料の作成である。

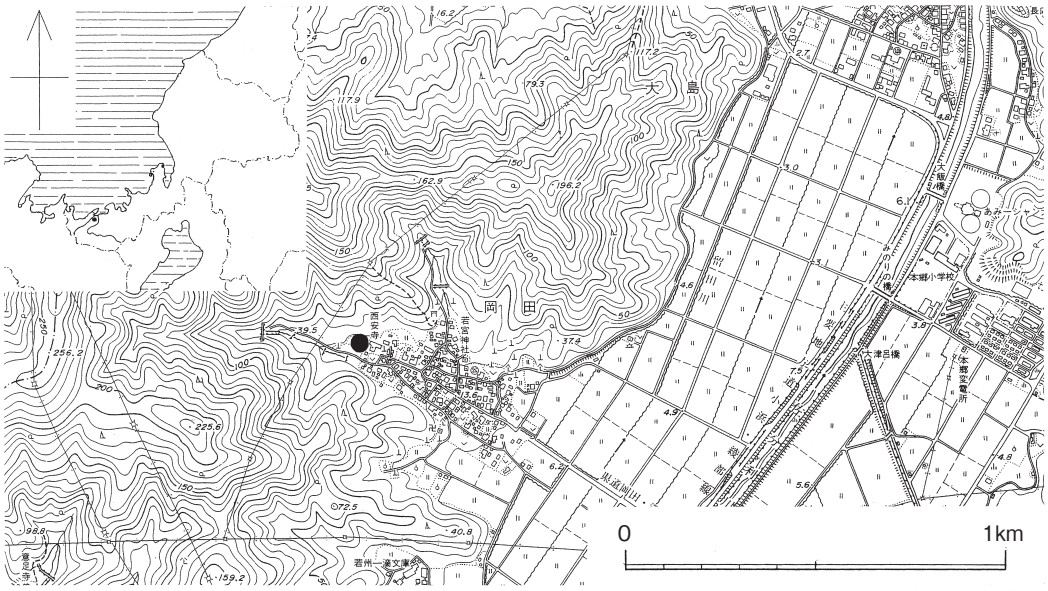
調査参加者は、古川登（福井市教育委員会文化課福井市文化財保護センター主幹）、村上雅紀（越前町教育委員会織田文化歴史館学芸員）、川嶋清人（おおい町教育委員会おおい町郷土史料館主事）の三名である。実測と製図・写真撮影は古川が担当した。

西安寺石造五重塔は、今日まで写真の撮影ないし簡易な略図が描かれる程度の調査は行われたことがあった模様であるが、実測図の作成されたことは無かった。ここに機会を得て実測調査を実施し、実測図を作成したので、その成果を速報としてここに報告し、本石造五重塔の実測図を研究者共有の資料としたいと思う。

西安寺石造五重塔は、調査終了後に以下のように、おおい町指定文化財として指定された。[1] 指定番号：おおい町指定第五一号、指定名称・伝本郷扶泰公墳墓（でんほんごうすけやすこうふんぼ）、指定日・平成二二年三月一八日。

一．地理的歴史的環境

福井県大飯郡おおい町は、若狭地方の西端部に位置し、旧大飯郡大飯町と旧遠敷郡名田庄村とが二〇〇六年三月に合併して成立した。旧大飯町は、主に佐分利川の貫流する平野部と若狭湾に大きく



第一図　西安寺石造五重塔位置図

突き出した大島半島からなっている。西安寺の所在するおおい町岡田は、佐分利川下流域の左岸に位置している。この地域は、鎌倉時代から戦国時代にかけて本郷氏の領地であった所であり、西安寺石造五重塔が本郷泰栄の墓あるいは本郷扶泰の墓という伝承を持つのはこのためであろう。

なお、岡田集落の北側、大籏山の山頂には大籏山城が位置しており、[2] 佐分利川対岸の尾内には本郷氏によって築かれた佐分利川流域で最も大きな達城がある。[2]

ここに報告する石造五重塔の所在する西安寺は、現在は臨済宗相国寺派の寺院で、創建は長享元（一四八七）年、開山は玉諸承祖禅師であるという。

二．西安寺石造五重塔調査概要

調査の方法　調査は、実測調査のみを実施した。縮尺は五重塔の規模から十分の一とし、各部材ごとに個別に図化し、図上で積み上げる方法を採用した。個別に図化するにあたって、相輪・五層の屋根材を順番に全て取り外して図化を実施した。塔身については重量の重さから移動することが出来なかったが、かろうじてその下面の観察と基礎上面の観察と図化を行うことは出来た。

西安寺石造五重塔の概要　西安寺石造五重塔は、おおい町岡田、岡田山西安寺の本堂背後にある墓地の一角に所在する。花崗岩製の五重塔で、本郷扶泰の墓であるという伝承と、本郷泰栄の墓であるという伝承とがある。

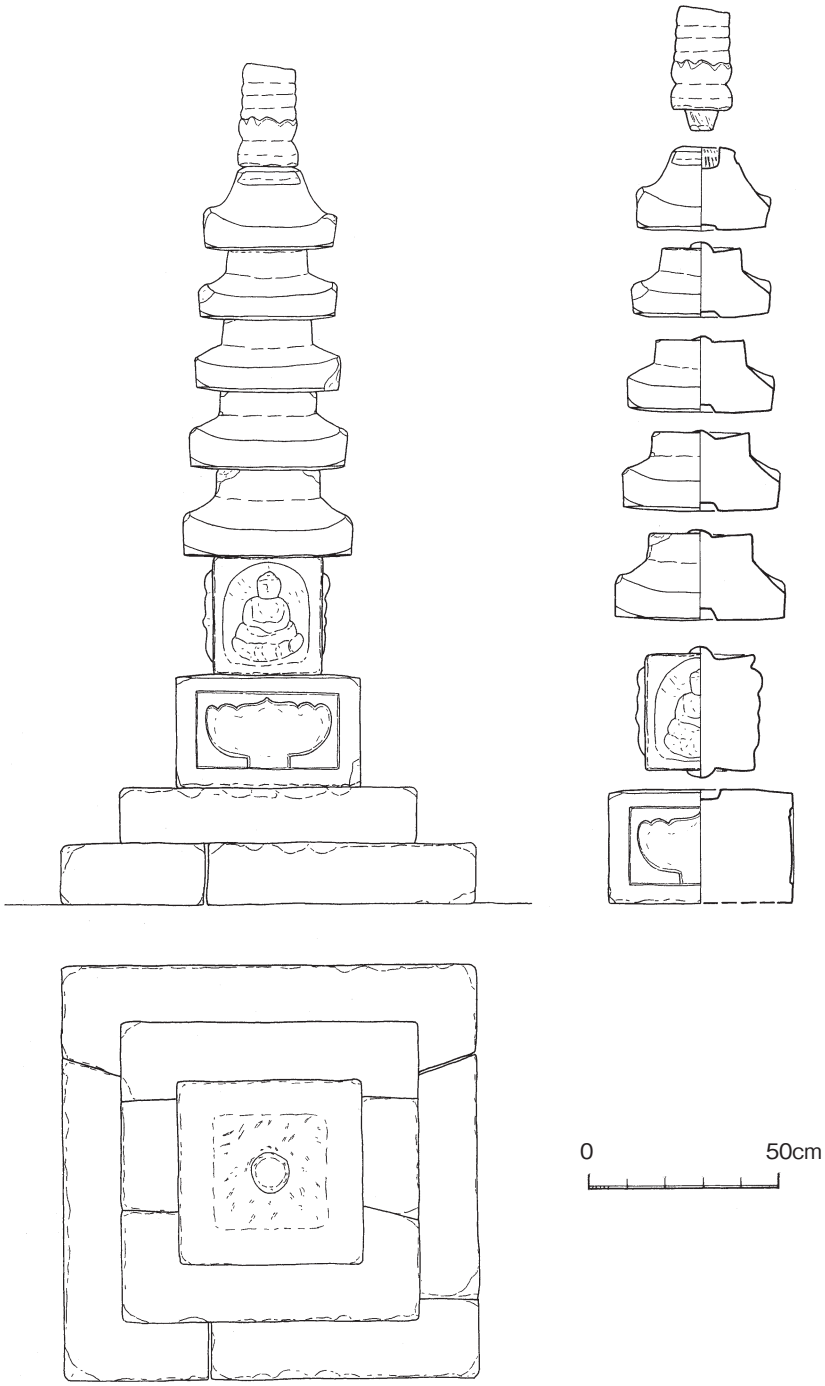
本塔の現状は、本塔の左面と背面とに南無云々と刻んだ位牌型の板碑があり、また墓地の現況と相俟って、現状では本来の背面が正面の如くに扱われている。

本塔は、基壇・基礎・塔身・五層の屋根材・相輪と全ての部材が揃っている。基壇の幅一一〇．〇糎・高さ三〇．五糎、基礎の幅四九．〇糎・高さ三〇．〇糎、塔身の幅二九．〇糎・高さ三一．〇糎、一層目の屋根材の幅四五．〇糎・一～五層目の屋根材の総高一〇三．〇糎、相輪の残存高二七．〇糎を測り、残存する総高二二一．五糎を測る。基壇から相輪まで全ての部材が花崗岩であること、基壇が存在することにおいて、本塔が造立当初の位置に存在している、ないしはその位置を大きく動かされていない可能性の高いことを指摘することが出来る。

また、五層の屋根材に逓減率の乱れが認められないので、本塔が造立当初から五重塔であったこと、相輪の上部を欠損している他は造立当初の姿をとどめていることを指摘することが出来る。以下、各部材ごとにその概要を報告する。

基壇　基壇は、切石の平積基壇で二段からなる。下段については四石の組み合わせで、正面の幅一一〇．〇糎、奥行き一〇九．〇糎、高さ一六．〇糎を測る。上段についても四石の組み合わせで、正面の幅七九．〇糎、奥行き七九．〇糎、高さ一四．五糎を測る。基壇の切石材の組み合わせ方から基壇の内部、あるいはその下部に、石室などの内部構造の存在することをうかがうことが出来る。

基礎　基礎は、正面の幅・奥行きとも四九．〇糎、高さ三〇．〇糎を測る。基礎上面の縁から中央部にかけて緩やかな傾斜を持つ。上面中央部は三〇．〇糎四方の方形をなし、研磨されず未調整でノミ痕が残る。その中央には径一〇．〇糎・深さ二．五糎を測る円



第二図　西安寺石造五重塔実測図

形の枘穴がある。正面・右面・左面には格狭間を配し、背面は無紋である。なお、格狭間を配した正面・右面・左面と無紋の背面に、紀年銘・願文などの存在ないし存在した痕跡を認めることは出来ず、それらは当初から存在しなかったものとみられる。

塔身　塔身は、正面の幅二九・〇糎、高さ三一・〇糎を測り、上面中央に径八・〇糎・高さ三・五糎を測る円形の枘、下面中央に径八・〇糎・高さ二・五糎を測る円形の枘がある。塔身の側面には舟形光背内陽刻式仏坐像が四面に配され、いわゆる四方仏をなす。このため、塔身に如来坐像の配されていることは判明する。しかし、それが金剛界四方仏であるのか、胎蔵界四方仏であるのかについては、その像容からは判明しない。なお、舟形光背は、その上端部が丸みを帯びて砲弾形に近い形状をなす。

屋根　屋根は、一～四層については上層の塔身と一体に成形された一体形の屋根で、五層目は相輪の露盤と一体に成形された一体形の屋根である。いずれも垂木形の表現を欠き、軒に反りを持つ無垂木有反形の屋根である。

一層目の屋根の幅四五・〇糎・同部の高さ一六・〇糎、二層目塔身の幅二八・〇糎・同部の高さ七・〇糎を測り、上面中央に径六・〇糎・高さ二・〇糎を測る円形の枘、下面中央に径九・〇糎・深さ三・〇糎を測る円形の枘穴がある。

二層目の屋根の幅四一・五糎・同部の高さ一五・〇糎、三層目塔身の幅二六・〇糎・同部の高さ五・五糎を測り、上面の中央に径六・〇糎・高さ二・〇糎を測る円形の枘、下面の中央に径九・〇糎・深さ二・〇糎を測る円形の枘穴がある。

三層目の屋根の幅三九・〇糎・同部の高さ一三・〇糎、四層目塔身の幅二四・〇糎・同部の高さ六・〇糎を測り、上面の中央に径六・〇糎・高さ一・五糎を測る円形の枘、下面の中央に径八・〇糎・深さ二・〇糎を測る円形の枘穴がある。

四層目の屋根の幅三七・〇糎・同部の高さ一二・五糎、五層目塔身の幅

0　20cm

第三図　西安寺石造五重塔基礎格狭間拓影

正面・右面

右面・背面

左面・背面

第四図　西安寺石造五重塔

二二・〇糎・同部の高さ六・〇糎を測り、上面の中央に径六・〇糎・高さ三・〇糎を測る円形の枘、下面の中央に径九・〇糎・深さ一・五糎を測る円形の枘穴がある。

五層目の屋根の幅三五・五糎・同部の高さ一七・五糎、露盤の幅一九・〇糎・同部の高さ四・五糎を測り、上面の中央に相輪を受ける径九・〇糎・深さ五・五糎を測る円形の枘穴、下面の中央に径九・〇糎・深さ一・五糎を測る円形の枘穴がある。

相輪　相輪は下から伏鉢・請花・九輪の下部四輪が残存し、それより上部は欠損している。九輪の上部五輪・水煙・竜車・宝珠についてはその破片さえも認められない。枘を除いた残存高二七・〇糎、伏鉢の径一六・〇糎・高さ七・〇糎、請花の径一六・〇糎・高さ六・〇糎を測る。九輪は一輪目の径一五・〇糎・残存する高さ一四・五糎を測る。伏鉢の下面中央に径八・〇糎・高さ五・五糎を測る円形の枘がある。請花は弁の幅が狭く、花弁先端が尖っているので、素弁の単弁とみることが出来るが、風化が著しいため複弁の可能性も否定することは出来ない。九輪は線彫りによって九輪間を区画した表現であるが、風化のため不明瞭なものとなっている。

三、西安寺石造五重塔の様式・製作年代

西安寺石造五重塔の様式　本塔の様式については、基礎の格狭間と塔身の舟形光背内陽刻式仏坐像から近江様式の石造多層塔である可能性の高さを指摘することが出来る。塔身

の舟形光背内陽刻式仏坐像は、舟形光背の上端部が丸みを帯びて砲弾形に近い形状をなしており、東近江市妙法寺町[3]薬師堂所在の永仁三（一二九五）年銘宝篋印塔、同市[3]柏木町正壽寺所在の正應四（一二九一）年銘宝篋印塔、同市[3]川並町所在の乾徳寺永仁五（一二九七）年銘宝篋印塔に刻まれた仏座像に類例のあることを指摘することが出来る。

西安寺石造五重塔の製作年代　本塔の製作年代については、かつて増永常雄氏[4]が南北朝の製作であることを報告され、大森宏氏[2]が室町時代中期頃とされている。筆者は、近江地方における中世の宝篋印塔ならびに多層塔との比較検討を行い、その格狭間と舟形光背内陽刻式仏坐像の様式から一三世紀末から一四世紀前葉頃にかけて、鎌倉時代後期の製作である可能性が高いと考える。新しく考えるとしても、一四世紀前半を下る作品とは考えられない。それゆえに、一五・一六世紀代の製作である可能性は、全く考えられないと言ってよい。

大森氏のいう室町時代中期頃がいつを指すのか問題があるとしても、一般論的には一五世紀代のことと考えられ、氏は西安寺の創建年代と伝えられる長享元（一四八七）年を上限に本塔の造立時期を考えていたのではないかとは思われる。

次いで、西安寺石造五重塔の製作地について言及することとしょう。若狭では高浜町に日引において、日引石製石造塔の製作が行われていたことが知られているが、それは西安寺石造五重塔の製作年代より新しい一四世紀後半に始まっており、日引の石工が本石造五重塔の製作者でないことは確かである。

なお、若狭で花崗岩製石造塔の製作が行われた痕跡は認められていないが、花崗岩製石造塔は少なくないので、何処で製作されたものか検討する必要がある。本石造五重塔は様式から近江での製作ないし近江の石工が出張して製作した可能性が高いと考えるが、石材を検討して解を求めることとしたい。

四．西安寺石造五重塔の被葬者伝承について

西安寺石造五重塔には、二人の被葬者の伝承がある。『若狭郡県志』[5]には「本郷泰栄墓在岡田村西安寺中。斯寺建立之檀越而称治部少輔、―略―泰栄死号西安寺鉄山道剛」。大飯町誌の寛永七年十二月の村松喜太夫家文書[6]には「本郷扶泰公之墳岡田村ノ西安寺之寺内ニアリ　左家老　村松氏墓号高嶽道光　本郷扶泰公墳墓　号西安寺殿鉄山道剛　右家老荒木氏墓号寿月養晴」とある。

本郷扶泰の墓であれば、将軍義尹から若狭国の本領を安堵されたという永正七年（一五一〇）以後、本郷泰栄の墓であれば、村松家文書に記された本郷泰栄が本郷を退出したという天正十年（一五八二）以後のものとなる。

しかるに、西安寺石造五重塔は一三世紀末から一四世紀前葉頃に製作された蓋然性が高いものであるので、一六世紀に存在した人物である本郷泰栄の墓ないし本郷扶泰の墓であるという伝承とは全く合致しないこととなる。

一九七九年の増永常雄氏の報告[4]では本郷泰栄の墓という伝承のみを記し、一九九四年の大森宏氏の報告[2]では、大簇山城の築城時期に触れる中で西安寺五重塔について触れる。大森氏は若狭郡県誌に記載された「本郷泰栄墓

在二岡田村西安寺中一。斯寺建立の檀越而称二冶部少輔二、其所居々の城址三尾内村与二上下村之間山上一、泰栄死号西安寺鉄山道剛」であるなら、大籏山城の推定される築城時期と本郷泰栄とでは時期が合致しないと言う。そして、平成元年に再編された「大飯町誌」の「村松家文書」寛永七年（一六三〇）十二月に記したとされるものの中に、西安寺の墓は「本郷扶泰」とあって、「西案寺殿鉄山道剛」の戒名を持つと記されていることであると言い、扶泰は謎の永正年中（一五〇四～一五二〇）以前に存在したと推定され、本郷政泰と同一人物ではという見解のあることを紹介し、そうすると山城・墓の年代が一致し、矛盾はなくなるのであると言う。

本郷泰栄墓の所在を伝える牧田近俊の『若狭郡県志』[5]、本郷扶泰墓の所在を伝える村松喜太夫家文書[6]、そのいずれも江戸時代前期のものである。このことによって、江戸時代前期に西安寺に本郷泰栄墓が存在するという伝承と、本郷扶泰墓が存在するという伝承のあったことを知ることが出来る。

ところで、江戸時代に記された文献から西安寺石造五重塔を墓と認識することも、その被葬者を推定することも容易なことではないと思われる。

墓にするには珍しい五重塔が、なにゆえに「墓」と考えられたのかを考察すると、西安寺に本郷泰栄墓・本郷扶泰墓の存在が伝承されていたことにあった可能性を考えることが出来るだろう。その伝承に対し、後世の人々が最も立派な石塔を「本郷某の墓」と考えたことは想像に難くない。加えて、いずれの文献も墓の形が五重塔であることを全く記していないことは注意されてよい。すなわち、西安寺石造五重塔を「本郷某の墓」と考えたのは、江戸時代の人々ではなく、報告や町誌を執筆した現代の人々ではなかったのかと思われるのである。西安寺にある最も立派な石塔こそ「本郷某の墓」と考えたのであろう。

五．収　束

西安寺石造五重塔は、格狭間と舟形光背内陽刻式仏坐像の様式から鎌倉時代後期の一三世紀末から一四世紀前葉にかけて、近江での製作ないし近江の石工が出張して製作した可能性が高い。

被葬者の伝承については、いずれも石造五重塔の製作より後世の人物であり、その人物の死後に製作されたものでないことは確かである。

西安寺石造五重塔の造立者は、その制作年代が鎌倉時代後期であるので、地頭の本郷氏である可能性が高いことは指摘できる。加えて、本石造五重塔の造立年代が西安寺の創建されたと伝えられる長享元（一四八七）年より古いことが注意されるべきで、このことによって、西安寺に石造五重塔が建てられたのではなく、石造五重塔のある岡田に西安寺が建立された可能性のあることを示唆している。むろん、西安寺に先行する寺社があり、そこに本石造五重塔が建てられた可能性も考慮され、今後検討されるべき課題である。

いずれにしても、江戸時代の伝承を記録した書籍・文書類を史料批判することもなく、誰の墓かというあまりに素人的な設問が問題である。「伝本郷扶泰公墳墓」という指定名称は、「伝」が付けられていたとしても、鎌倉時代の石造五重塔に一六世紀に実在した人

物の名を付すという滑稽なものである。

筆者は、近く発行される日本石造物辞典にも西安寺石造五重塔として解説したが、それはかかる誤った名称から、そのような理解を誘導しないための措置であることを断っておこう。

本稿をまとめるにあたり、川嶋清人・村上雅紀氏より地図・文献の複写をいただき、福澤邦夫・篠原良吉氏から西安寺石造五重塔について教示を得た。ここに記して深い感謝の意を表します。

平成二三年、三月二十一日成稿

注・参考文献

（1）おおい町二〇一〇「伝本郷扶泰公墳墓（岡田）を町指定文化財へ」『広報おおい二〇一〇年四月号』おおい町
（2）大森　宏一九九四「大飯町の中世山城」『わかさ本郷茶谷山城跡発掘調査報告書』大飯町教育委員会
（3）東近江市妙法寺町薬師堂所在永仁三年銘宝篋印塔、同市柏木町正壽寺所在正應四年銘宝篋印塔、同市川並町所在乾徳寺宝篋印塔については福澤邦夫氏にご教示いただき、二〇一〇年六月五日（土曜日）に実見した。
（4）増永常雄一九七九「若越石造美術品資料（一）」『歴史考古学』3号　歴史考古学研究会
（5）小浜市史編集委員会編一九七一牧田近俊「若狭郡県志」『小浜市史』資料編弟1巻
（6）大飯町誌編纂委員会編一九八九『大飯町誌』大飯町
古川登・村上雅紀二〇〇四「越前地方における石造多層塔の研究―方山真光寺石造多層塔をめぐって―」『清水町埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ片山鳥越墳墓群・方山真光寺跡塔址』清水町教育委員会
古川久雄二〇〇一「丹後伊根石の宝篋印塔（1）」『日引』第2号　石造物研究会
古川久雄二〇〇三「長崎県南松浦郡玉之浦町大宝寺五重塔と島山島宝塔」『日引』第4号　石造物研究会
古川久雄二〇〇三「安寿姫塚宝篋印塔」『日引』第4号　石造物研究会
大原陵路一九八四「若狭本郷氏について」『福井県史研究』創刊号　福井県総務部県史編纂室
田岡香逸一九六八『近江の石造美術』1　民俗文化研究会
田岡香逸一九六九『近江の石造美術』2　民俗文化研究会
田岡香逸一九七六『近江の石造美術』3　民俗文化研究会
田岡香逸一九七三『近江の石造美術』6　民俗文化研究会
田岡香逸一九七九「若狭の石造美術」1『若狭』二五号　若狭史学会
田岡香逸一九七九「若狭の石造美術」2『若狭』二六号　若狭史学会
田岡香逸一九七九「若狭の石造美術」3『若狭』二七号　若狭史学会
川勝政太郎一九八一『新版石造美術』誠文堂新光社